

ケンブリッジ大学のカレッジ制度 —トリニティ・カレッジの栄光—

College System of the University of Cambridge —The Glories of Trinity College—

柴田 賢
Ken SHIBATA

(要旨)

イギリスのケンブリッジ大学は大学とカレッジという二重構造をもつことで、世界でも特異な存在である。教官も学生も31あるカレッジのどこかに所属しなければならない。カレッジにおけるチューターや指導教官による少人数での教育制度が、ニュートンをはじめ多くの逸材を生んできた。トリニティ・カレッジの学部学生数は約650人であるが、これまでに31人のノーベル賞受賞者を出した。トリニティ・カレッジの同窓会にみられるように、同窓生を大切にしている伝統的な方針も、ケンブリッジ大学やトリニティ・カレッジの輝かしい歴史と無縁ではなからう。

キーワード：ケンブリッジ大学、トリニティ・カレッジ、カレッジ制度、ノーベル賞受賞者、アマールティア・セン、同窓会

The University of Cambridge, Trinity College, college system, Nobel Laureate, Amartya Sen, Annual Gathering

1. まえがき

私は2000年7月、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ (Trinity College) の同窓会に出席のため9年ぶりにケンブリッジを訪問した。これで5回目の訪問となるが、せまい街中に群立するカレッジを見ると、また古巣にやってきたという感じを新たに感じる。このたまたまは何百年の間あまり変わっていないと思う。私は1960年秋から1961年夏までの1年間をBritish Council 奨学生としてここで過ごした。小文では、ケンブリッジにおける大学とカレッジの関係、カレッジ制度の概要、ニュートンをはじめ多くの偉人を生んだトリニティ・カレッジの紹介とその同窓会にまつわる話を述べる。

2. ケンブリッジ大学とカレッジの関係

ケンブリッジ大学が世界的に特異な大学であるのは、

オックスフォード大学と共に創立当初から現在までカレッジ制度を保ち続けてきたという点であろう。厳密には、大学の創立は1209年、最初のカレッジ (ピーターハウス・カレッジ) が設立されたのが1284年であるから、カレッジの方が少し後である。ケンブリッジ大学 (The University of Cambridge) の構成は日本の大学と同じで、学部、学科をもち、教官 (教授、助教授、講師) がいて、講義を受け、実験・実習をする所である。これに対して、カレッジ (College, イギリスでの発音はコレッジに近いが、ここでは慣習に従ってカレッジと書く) は学生が宿泊し、勉学し、食事をし、礼拝をするところである。従ってカレッジには必ず宿舎と食堂とチャペルがある。学生は学期中の一定期間 (約170日) カレッジに宿泊することが義務づけられている。カレッジの教官はフェロー (Fellow) と呼ばれ、昔は学生と生活を共にしてい

たが、現在は教官の多くは自宅に住んでいる。このように、ケンブリッジでは大学とカレッジとが二重構造をなして、教官も学生も原則としてどこかのカレッジに所属しなければならない。入学試験もカレッジごとに実施され、カレッジに入学すれば自動的にケンブリッジ大学の学生となる。また大学は国立であるのに対して、カレッジは独立採算制をとる私立であり、人事や予算などについて完全に自主性を保っている。

ケンブリッジには現在31のカレッジがある。これらのカレッジはそれぞれ異なった歴史や特徴や校風をもっている。3つの女子校を除いて男女共学であるが、私がいた当時のカレッジはほとんどが男子校であった。また大学院学生しか受け入れないカレッジが2校ある。カレッジの長にはカレッジ毎に独特の名前が付いている。トリニティ・カレッジの場合はマスター(Master)と呼ばれている。他に、President, Principal, Mistress, Provost, Warden といった名前と呼ばれているが、いずれの場合もカレッジの長はカレッジに關係のある有名人になることが多い。トリニティ・カレッジとチャーチル・カレッジのマスターは形式的ではあるが、女王によって任命される。なおカレッジの長は学寮長または学長と訳されているが、ここではマスターを使う。

ケンブリッジ大学のカレッジのもう一つの特徴は、チューター(Tutor)と指導教官(Director of Studies)の制度であらう。学生にはチューターと指導教官が一

人づつづく。チューターが学生の生活指導の役割を担当するのに対して、指導教官はスーパーヴィジョン(supervision)と呼ばれる個人指導を担当する。スーパーヴィジョンとは主にカレッジのフェローが学生を1対1、あるいは2、3人の少人数で指導をすることで、定められた科目毎に毎週1回学生が学習した内容を議論し指導をする。さらに学部での講義の補習もここで行われる。これがケンブリッジの伝統的で最も特徴的な教育制度である。ケンブリッジ大学全体の学生数は、最近の統計によれば学部学生(undergraduate)が11100人、大学院学生(graduate)が4600人である。従ってカレッジ1校あたり平均の学部学生数は約380人である。ケンブリッジ大学の修学期間は3年であるが、最近理工系の一部の学部で4年コースが選択できるようになった。なお、現在の授業料は大学が1025ポンド(約18万円)、カレッジは平均で約2900ポンド(約51万円)であり、他と比較してそれほど高くはない。

3. トリニティ・カレッジと偉人たち

私は留学先としてケンブリッジ大学の地球物理学教室とトリニティ・カレッジに所属することがきまっていたが、不勉強でそれがどんなカレッジであるかほとんど知らずにケンブリッジに行ったことになる。トリニティ・カレッジの門をくぐって初めてその偉大な歴史と伝統を知ることとなった。私は大学院学生で

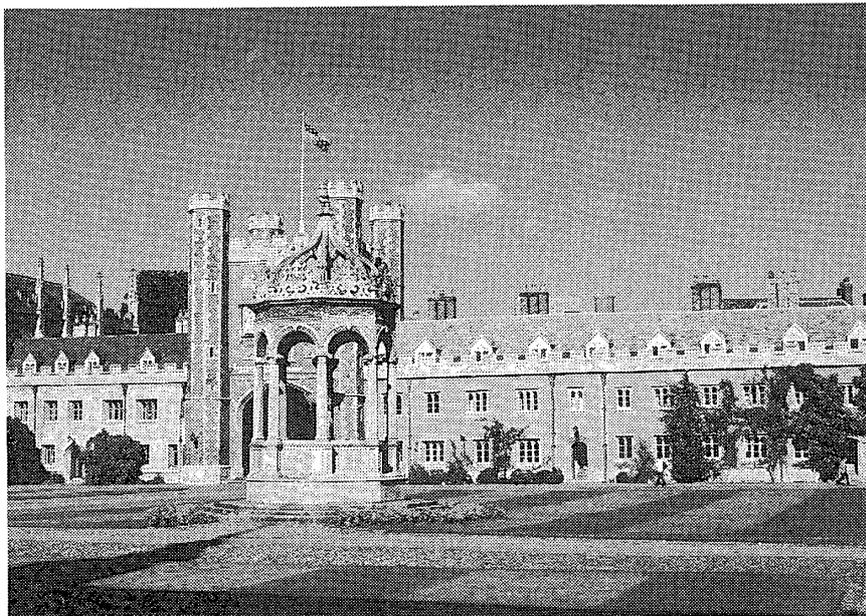


写真1 トリニティ・カレッジのグレート・コート(広い中庭)から見た建物: 宿舎, 正門(旗の立っている建物), 噴水。ニュートンは正門左脇の2階の部屋に住んでいた。

あったため、残念ながらカレッジの宿舎に住むことはできなかったが、毎晩夕食のためカレッジを訪れ、食後学生たちとしばし歓談をするのが常であった。トリニティ・カレッジ（写真1）はケンブリッジ最大のカレッジである。現在の学生数は学部学生約650人、大学院学生約350人で、学部学生数は私がいた当時とあまり変わっていない。女子学生の割合は約30%である。フェローの数は約150人で学生数に対する割合はきわめて高い。

トリニティ・カレッジは1546年、英国王ヘンリー八世によって創設された、王家と縁が深いカレッジである。エリザベス女王の父ジョージ六世やチャールズ皇太子もトリニティ・カレッジで学生生活を送った。しかし、チャールズ皇太子の長男のウィリアム王子はパラッチに追いかけられるのをきらってスコットランド最古の名門、セント・アンドリュース大学に進学することが最近きまった。

歴代のマスターにはそうそうたる顔ぶれがそろっている。20世紀に限ってみても、電子を発見してノーベ

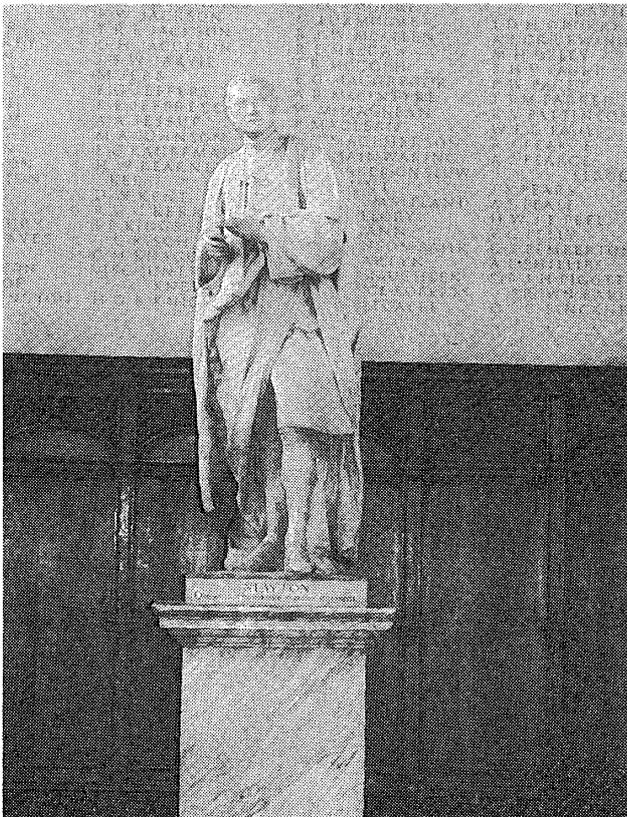


写真2 トリニティ・カレッジのチャペルにあるニュートンの像。ニュートンはこのカレッジの学生であり、フェローであった。後の壁には第二次世界大戦で戦没した400人のトリニティ・カレッジ出身者の名前が刻まれている。

ル賞を受賞したJ.J.Thomson以来、歴史家のG.M.Trevelyan、ノーベル生理学医学賞を受賞したLord Adrian, A.Hodgkin, A.Huxley, 外務大臣を勤めた Lord Butler, 数学のノーベル賞といわれるフィールズ賞を受賞したM.Atiyahと続き、現在のマスターは1998年にノーベル経済学賞を受賞したAmartya Sen（アマーティア・セン）教授である。私が留学した当時のマスターはLord Adrian であり、2, 3度話をしたことがある。

万有引力の法則を発見したニュートン（写真2）はトリニティ・カレッジの出身である。ニュートンは1661年にトリニティに入学し、1669年に27歳の若さで教授になり、1696年までここで生活をした。ニュートンが住んでいたのは「ニュートン階段」と名付けられたE階段を上った2階E4という部屋で、「プリンキピア」の構想を練ったのもここである。ただし、幸運な学生が今でもこの部屋に住んでいるので公開はされていない。

トリニティ・カレッジ出身のノーベル賞受賞者（表1）は31人にのぼっていて、ケンブリッジ大学全体の受賞者数74人の半数近くを占め、オックスフォード大学の28人より多い。ただし、最近の受賞者の中には学部を他の大学で終了し、大学院をトリニティ・カレッジで終了した人たちがかなりいる。受賞者の顔ぶれを見ても、トリニティは理系に強いカレッジであることがわかる。この他にも有名人には事欠かないが、パイロン、マコーレー、ドライデン、テニソン、バートランド・ラッセル等、世界的に有名な文人もこの出身者であり、インドのネール首相もそうである。1学年がわずかに200人前後のカレッジからこれだけの偉人たちが生まれたということは、特徴ある教育制度に加えて、何か人を引きつける魅力がトリニティ・カレッジにはあるに違いない。それは、一時期をここで学んだ学生たちによって築き上げられた伝統と、450年という長い歴史がもたらした風格であろう。

4. Amartya Sen 教授について

トリニティ・カレッジのマスターのAmartya Sen教授は1933年インド・ベンガル州サンティニケタンで生まれた。この街はインド人で初めてノーベル賞を受賞した詩人タゴールの出身地でもある。タゴール家とは家族づきあいがあって、「不滅の」という意味のAmartya という名前はタゴールによって名付けられた。9歳の時にベンガル地方を襲った飢饉の体験が後

表1. トリニティ・カレッジ出身のノーベル賞受賞者

受賞者	受賞部門	受賞年	受賞理由
Lord Rayleigh	物理学	1904	アルゴンの発見
J J Thomson	物理学	1906	気体中の電子伝導の研究
Ernest Rutherford	化学	1908	放射能の原理の発見
William Bragg	物理学	1915	X線による結晶構造の解析
Lawrence Bragg	物理学	1915	X線による結晶構造の解析
Charles Barkla	物理学	1917	元素の特性X線の発見
Niels Bohr	物理学	1922	原子構造の解明
Francis Aston	物理学	1922	質量分析器による同位体の発見
Archibald Hill	生理学医学	1922	筋肉の熱発生の研究
Austen Chamberlain	平和	1925	ロカルノ条約の締結
Owen Richardson	物理学	1928	熱電現象の研究
Frederick Gowland Hopkins	生理学医学	1929	成長促進ビタミンの発見
Lord Adrian	生理学医学	1932	神経細胞の機能の研究
Henry Dale	生理学医学	1936	神経刺激の伝達物質の研究
George Thomson	物理学	1937	結晶による電子回折の発見
Bertrand Russell	文学	1950	「西欧哲学史」などの著作
Ernest Walton	物理学	1951	加速装置による原子核変換の研究
Richard Syngé	化学	1952	分配クロマトグラフィーの開発
John Kendrew	化学	1962	ミオグロビンの構造決定
Alan Hodgkin	生理学医学	1963	神経繊維のイオン機構の研究
Andrew Huxley	生理学医学	1963	神経繊維のイオン機構の研究
Brian Josephson	物理学	1973	ジョセフソン効果の予言
Martin Ryle	物理学	1974	電波天文学の研究
James Meade	経済学	1978	国際貿易の理論的研究
Pyotr Kapitsa	物理学	1978	低温物理学の基礎研究
Walter Gilbert	化学	1980	DNAの塩基配列決定法の開発
Aaron Klug	化学	1982	生物巨大分子の微細構造の研究
Subrahmanyan Chandrasekhar	物理学	1983	恒星の進化に関する研究
James Mirrlees	経済学	1996	非対称情報下での経済的誘因
Amartya Sen	経済学	1998	厚生経済学の研究
John Pople	化学	1998	量子化学における計算手法の開発

トリニティー・カレッジのホームページ (<http://www.trin.cam.ac.uk>) による

に経済学を専攻する一因になった。カルカッタ大学を経てケンブリッジのトリニティ・カレッジに入学し、1959年経済学博士号を取得した。私共がトリニティ・カレッジに滞在した時期にSen教授は講師として経済学を教えていたと、ある同窓生は話していた。記憶はないが当然ホール（大食堂）のハイテーブル（high table）で夕食をしていたことだろう。ハイテーブルというのはカレッジのフェローが食事をする席で、学生の席の前方で一段高いフロアにある。Sen教授はその後デリー、ロンドン（LSE）、オックスフォード、ハーバードの各大学で教授を勤め、1998年1月にトリニティ・カレッジのマスターとして母校に帰った。このポストにイギリス人以外の人物がつくのは初めてである。そしてその年の12月、厚生経済学の基礎を築いた功績によりアジア人で初めてノーベル経済学賞を受賞した。Sen教授の専門はその主著「Poverty and Famines（貧困と飢饉）」に見られるように、貧困の測定、不平等の判定、国民所得の推定等といった、評価を中心とした経済学である。Sen教授は貧困に関するすぐれた業績により、「経済学の良心」あるいは「経済学のマザー・テレサ」と呼ばれるほどで、かなり前からノーベル賞の候補にあげられていた。しかし最近のノーベル経済学賞は金融工学など、予測を中心とした経済学者に与えられてきた。経済学の分野でも倫理や哲学的思考の必要性を指摘した経済学者にノーベル賞が与えられたということは、最近の経済学の動向に警鐘を鳴らすものであろう。Sen教授はノーベル賞の賞金の大半を使ってPratichi Trustという基金を設立し、インドとバングラデシュの初等教育と健康増進に役立てる計画であるとき、貧者の味方Sen教授の面目躍如たるところである。

今回の同窓会の機会に、私はできればSen教授に会ってみたいと前々から思っていた。イギリスへ向かう飛行機の中で日本経済新聞をとって見ていたところ、全く偶然にSen教授の対談の記事を見つけたときには本当に胸が高ぶった。写真入りのほぼ半面を占めるかなり大きな記事だ。これをもって面会しようときめた。ケンブリッジについた翌日、Sen教授の都合を聞いたら、午後イタリアから帰るので3時頃連絡をするように秘書にいわれた。3時に電話をしたら丁度会議中で、待つこと約30分、秘書にMaster's Lodge（マスターの居室）に来るようにいわれた。ポーターと呼ばれるカレッジの事務員が山高帽子をかぶって私をMaster's Lodgeの入口まで案内してくれて、そこで

秘書の出迎えを受け2階の応接室に通された。ここは歴代のマスターたちが面会に使用してきた由緒ある部屋で、トリニティ・カレッジ出身者の肖像画が壁のあちこちに飾られている。調度品も時代をしのばせるすばらしい物ばかりである。40年前、私が当時のマスターのLord Adrian に会ったのもこの部屋である。しばらくしてSen教授が待たせてすまないと云いながら現れた。写真やテレビで顔は知っていたので初対面の驚きはなかったがさすがに緊張した。自己紹介をすませて早速例の新聞記事を見せた。教授はびっくりしながら、この対談は1カ月前に行ったものだが、記事になったことは知らない、何と書いてあるかと聞いた。そこで見出しに「民主主義こそ成長の条件」、「グローバル化と共存できる」と書いてあると伝えた。Sen教授は、日本語は分からないがこれはいい記念になると記事を受けとった。受賞直後に行われたNHK解説委員（当時）の高島肇久さんとのテレビ対談については、高島さんは大変鋭い質問をしたと話していた。教授の教えを受けた日本人は何人かいるが多くはハーバード大学当時の教え子だそうだ。15分程話をした後会議に戻らなくてはならないということで、ニュートンの肖像画の前で一緒に写真（写真3）を撮って別れ

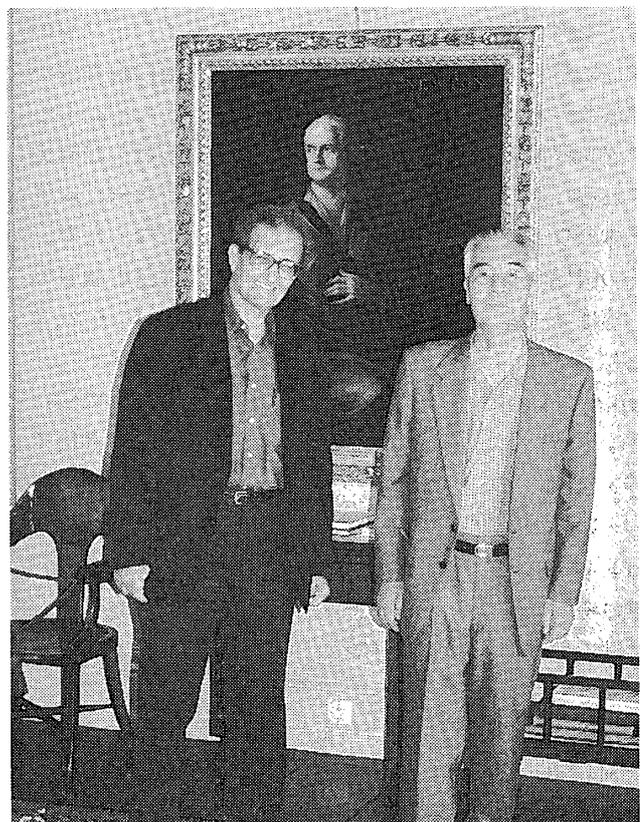


写真3 トリニティ・カレッジのマスター Amartya Sen 教授。後の肖像画はニュートン。

た。短い時間であったが、念願が叶い本当に印象に残る面会であった。

帰国後同窓会のお礼の手紙と写真を送ったところ、10日もたたないうちに返事が届いた。写真のお礼とトリニティ再訪を望む短い手書きの手紙であるが、ノーベル賞受賞後急に忙しくなったらしいSen教授から、このように早い返事をもらうとは予想していなかったので感激した。改めて、トリニティ・カレッジのマスターの偉大さと余裕を実感した次第である。

5. トリニティ・カレッジの同窓会

トリニティ・カレッジの同窓会 (Annual Gathering) は毎年7月と9月の2回開催される。毎年学生の入学年度を2, 3年に限って招待される。2000年7月の同窓会では1958-1960年入学の学生が対象で、約300人が集まった。同窓生にはカレッジの宿舎が与えられ(勿論無料)、盛大な晩餐会がカレッジのホールで3時間にわたって続けられた。晩餐会の次第は昔からの伝統にのっとったきわめて儀式的なものである。同窓生の服装はBlack tieと指定されていて、礼服に黒の蝶ネクタイをして、各自があらかじめ選んだ席に着く。マスターやフェローは前方のハイテーブルにガウンを着て着席する。今回私は幸いにもこのハイテーブルの末席に着くことができた。ドラの音を合図に晩餐会が始まり、全員が起立してまず年長のフェローにより「グレイス」とよばれるラテン語の感謝の祈りが唱えられる。続いていよいよ食事が始まった。テーブルに数本のワイングラスが並んでいたのが気になったが、その訳は食事が進むうちにわかった。晩餐会の食事の内容はスープから始まるフルコースで、メニューによればメインはGuinea fowlのワイン蒸しとあった。Guinea fowlとは何かといぶかりながらチキンに似た味を楽しんだが、これがホロホロ鳥であることは後で辞書を引いて初めてわかった。イギリスの食事はまずいというのが定説であるが、私自身はカレッジの夕食はまあまあと思いながら食べていた。この晩餐会の料理は特別で見かけもよく味も結構よかった。食事に合わせて何と6種類のワインが出された。トリニティ・カレッジのワイン・セラーはケンブリッジでは有名だそうで、私はワインにはあまり関心がないが最後に出たMadeira Bual 1952などはかなりの逸品ではないかと思う。晩餐会も半ばをすぎた頃、マスターの発声により女王を称えて乾杯があり、イギリスの国歌“God Save the Queen”が食堂の2階ホールに待

機していた聖歌隊と共に全員で歌われる。そして同窓生の代表が晩餐会への招待に感謝の挨拶をし、つづいて聖歌隊がコーラスを披露した。次にマスターがユーモアを交えた挨拶をして、再びコーラスがあって3時間にわたった長い晩餐会も終わりとなった。

6. カレッジの財政

ケンブリッジの7月は夏休み期間中で学生のほとんどが帰省しているため、カレッジには学生の姿は少なく昼間は観光客でにぎわっている。カレッジでは夏休みの期間を利用して学会や語学学生のために宿舎を開放している。これはお金を取ってやっているわけで、カレッジのいわばサイドビジネスである。ケンブリッジのカレッジは前に述べたとおり私立である。勿論国はかなりの額の助成金をカレッジに出していて、それは財政状態にもよるが平均としてカレッジの予算の30%程度を占めている。しかし助成金は昔に比べてかなり減ったらしい。従って、サイドビジネスはカレッジの重要な収入源である。トリニティ・カレッジはケンブリッジ近郊に広大な土地を所有しており、筑波研究学園都市のミニ版であるCambridge Science Parkを運営している。ここでは海外を含めて約60のハイテク企業やベンチャー企業が、大学と連携をとりながら先端技術の研究や開発に取り組んでいる。ここで得た利益もカレッジの新しい宿舎の建設や伝統的な建物の保存に使われるであろう。ここで忘れてはいけないのが、篤志家による寄付である。毎年同窓生のもとに届けられる年報 (Annual Report) には額の大小に関わらず寄付者の名前が記されていて、カレッジはこういう人たちによっても支えられているということを実感する。私も同窓会出席の折にはささやかであるが、寄付をすることに決めている。

7. 同窓生へのサービス

トリニティ・カレッジの同窓生すべてに年報や晩餐会などのサービスをするということは、カレッジの財政によほどの余裕がないとできないことである。事実、トリニティ・カレッジとキングス・カレッジはケンブリッジではもっとも裕福なカレッジといわれている。1学年の学生数が約200人と少人数であることも関係がある。それにしても、同窓生を大切に、サービスをするという考え方は、ケンブリッジの伝統的な方針であり、それが長い間すたれずに続いてきたことはやはり驚きに値する。例えば、10年ほど前からケンブリッ

ジ大学は広報誌「CAM (Cambridge Alumni Magazine)」(年3回)を新たに発行し、カレッジすべての同窓生に配布しているのもそのよい例である。この他にも、毎年9月末にAlumni Weekendと呼ばれる催しがあり、様々な講演会や展示が行われ、その案内が送られてくる。さらに、CAMCARDというメンバー・カードが最近発行された。一部のカレッジは最近入場料を取るようになったが、これがあるとフリーパスである。これらのサービスをみても、改めてケンブリッジ大学のふところの深さを感じさせられる。一方、日本の大学の場合はどうであろうか。例えば、私の母校である名古屋大学についていえば、確かに創立五十周年記念事業の折りに後援会から2、3度案内をもらっている。しかし、私は教授も勤めたが在任期間が短い(名誉教授でない)ため、退官後大学の刊行物の一つももらっていない。これらのことは名古屋大学が特別ではなくて日本の国立大学ではどこでも似たりよったりであろう。日本の大学もケンブリッジ大学のように同窓生を大切にするという風習はぜひ見習ってほしいものである。名古屋文理大学も2年後には卒業生を世に送り出すことになる。彼らが古巣のことを時には思い出してくれるよう、同窓生に対するサービスを今から考えておく必要があるだろう。例えば、トリニティ・カレッジのように卒業年度を限って数年に一度は「稲友祭」や「稲友会総会」に正式に招待するのも1つの方法であろう。

訪問を終わってトリニティ・カレッジを後にする時、私はいつも一時の感傷にひたることになる。去りがたい気持をおさえて、グレート・コート of 緑の芝生とニュートンも歩いた石畳をゆっくり見回し、正門の木戸をくぐって外に出て、ヘンリー八世の像が飾られた壮大な正門を見上げながら、「さようならトリニティ、またいつか」とささやくのである。

参考文献

- 安部悦生 (1997) : ケンブリッジのカレッジ・ライフ. 中公新書, 1350.
- 藤原正彦 (1991) : 遙かなるケンブリッジ. 新潮社.
- Sen, A. K. (1981) : Poverty and Famines, An Essay on Entitlement and Deprivation. Clarendon Press, Oxford.
- アマルティア・セン著, 黒崎 卓・山崎幸治訳 (2000) : 貧困と飢饉. 岩波書店.

Woodward, S. (1999) : Original Sen. CAM, Lent Term 1999, p.13-15.